

令和元年度 第2回教育課程編成委員会 議事録

日 時：令和元年11月27日(水) 19時00分～20時45分

場 所：熊本総合医療リハビリテーション学院1号館 会議室2

出席者：18名

〈学外委員〉7名

平田 好文（熊本託麻台リハビリテーション病院 理事長・病院長）

中島 雪彦（大阿蘇病院 リハビリテーション課 課長）

福田 靖子（合志第一病院 リハビリテーション科 科長）

今田 吉彦（熊本機能病院 総合リハビリテーション部 作業療法課 課長）

村上 智章（熊本赤十字病院 臨床工学課 課長）

浅井 裕晴（青磁野リハビリテーション病院 義肢装具室）

西岡 和男（熊本市消防局 警防部 首席審議員）

〈学内委員〉11名

辻野学院長、山本顧問、須加原副学院長、中原副学院長

坂崎教育部長、鬼塚事務部長、高木副教育部長兼作業療法学科学科長

池田理学療法学科学科長、藤井臨床工学科学科長

本田義肢装具学科学科長、後藤救急救命学科学科長

1. 開会

2. 学院長あいさつ

辻野学院長から委員会開会にあたり挨拶が行われた。

3. 議事録確認

辻野委員長より前回の議事録の確認が行われた。また、要約版の議事録については、後日ホームページにて公表することが確認された。

4. 議事

（1）教育課程の現状と今後の課題（会議資料）

辻野委員長より、本日の会議の進め方について説明が行われた。

次に、学内委員から会議資料に基づき、教育課程の現状と今後の課題について説明が行われた。

学外委員より、以下のような意見が寄せられた。

- ・臨床の現場にいる人間には、臨床実習前後での診断的評価が実際に行われて臨床実習に送り出されているということが見えなかったので、資料を読んで嬉しく思った。
- ・CC（クリニカル・クラークシップ；診療参加型臨床実習）については、学院は早くから取り組み、啓発活動も積極的にされているので今後も更に進めていただきたい。
- ・理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則改正に伴い、臨床実習指導者は実務経験5年以上であり、かつ講習会を受講した者でないと指導ができないということについて、私の病院のスタッフもそうだが、まだまだ意識が低い現状がある。学院でも臨床実習施設に対して講習会参加への啓発活動に取り組みられてはどうかと思う。
- ・臨床実習施設では、学生を評価する最低基準が定まっていなかったり、教育内容にも偏りがあったり、必要以上のレベルを要求することもあるという印象を持っている。臨床実習指導者講習会で教育内容にばらつきがないように教育方法を教育し優秀な実習指導者を確保していただきたい。
- ・学生の状況がずいぶん変わってきた中で、先生方の教育への取り組み、ご努力、ご尽力がすごいなと感じている。学習することが定着していない学生に指導していくところで、診療参加型臨床実習を導入することで自己学習も増えてくると思う。
- ・学院のいろんな取り組みの中で、グループ学習は主体的な学習につながるのととても良い取り組みだと思う。講義を座って聴くよりも、その内容を人に話すことにより、より効果的に知識の定着につながるということを私達も経験している。
- ・私達が学生の頃は、患者さんのことで統合と解釈をしていく時に、自分の知識をレポートにまとめて文章を書いていた。診療参加型臨床実習ではレポートを書くことがなくなっていくので、レポート等のような自分の知識をまとめるような学習はどのような形でしていくのか。
- ・学生のうちは、学ばないといけない課題があつてそれに対して予習復習する。臨床の現場では、患者さんを見て何に対して自分が知らないか、何を学ばないといけないかというところに自分で気付いて学んでいく必要がある。学生のうちに学ぶということが定着して、最終的に臨床の現場へ出ていけるといいと思う。
- ・1年生のうちから病院で医療機器の見学会を行い、医療機器に触れる機会が増えて、モチベーションの向上につながってよかった。
- ・学院では、eラーニングを利用されているということで、これは予習復習に役立つと思うので更に進めていただければと思う。
- ・第2種ME技術実力試験を受験する際に、履修していないところが試験問題に含まれるということで可哀想な気もするが、予習にはなっていると思う。
- ・現行の教育課程においてスリム化がなされたが、積み上げ型学習、問題提起型学習、主体的学習をベースにした各学年での教育方法・内容について資料を読んで、かなり手厚い教育がされていることが分かった。
- ・近年、義肢装具の分野において、デジタル技術を活用したさまざまなハードやソフトが開発され、臨床の現場でもかなり運用されている。部品はもとより、一般業務にも反映されている現状がある。かなり幅広い分野なので多岐にわたる学習が必要だと思うが、是非、教育課程の中に取り入れて行かなくてはいけない分野だと感じている。
- ・救急救命学科については、教育課程の完成年度ということで、資料を見ても確実に実力を積み上げていく基礎教育から応用まで頑張ってもらえている。

- ・救急救命士法の改正については、救急救命士の資格を取っても医療従事者として働くことができない人が非常に多いということで、病院の中にも救急救命士の職域を作って行こうという国の動きがある。そうなってくると、求められる教育内容も変わってくるかもしれないので、教育期間がかなりタイトになるのではないかと思います。今年、完成年度を向かえた教育課程も次のステージを考えるとその在り方について大胆な発想を持つ必要があるかもしれない。今後、社会が救急救命士の資格を持っている者にどういったことを求めてくるのか注視していく必要がある。これまでの2年間については、いろいろなものが整理されて成果が出ていると思うが、今後更に新たな波にも応えていけるような考え方を持っておかなければならない。
- ・ICTやAIを可能であれば積極的に取り入れて、教育方法を変えていかないといけない。他の学校よりも魅力的な学校を作っていくためには必要なことだと思う。
- ・学生に気付いて欲しいことは、いろいろな人達と話をしたり交わったりすることで、いろいろなことに気付いたりすることである。学生の頃には、いろいろな人達と話をすることで気付けるということが一つの目標でも良いのではないか。
- ・働き方改革の影響として、臨床実習での学生指導に関しては、これまでは時間外に残って実習生の指導をしていたが、業務時間内に時間を作って指導をするようにしている。それでも十分な時間は取れていない状況である。
- ・働き方改革については、私の病院では実習生は4時くらいになるとスタッフルームに来てレポート等の整理を行っている。臨床実習指導者の方は、業務が終わって5時過ぎにスタッフルームに来て実習生の指導をしている。業務中に指導をするように言っているが、指導に熱が入り遅くなることもあるので指導者に対して指導を行っている。また、業務終了後は、スタッフの勉強会を自主参加で行っている。それについては、実習生も参加してもいいと伝えている。セラピストとして先輩達が学んでいるところを見せることも大事だと思っている。
- ・働き方改革については、実習生への指導を時間内に終わらせようとしているが、指導者が一生懸命になり時間外に指導する場合もある。それを時間外手当として認めるか認めないかという問題がでてくるので、一生懸命実習指導を行っている人には、できるだけ時間外手当を付けたいと思っている。
- ・多職種連携教育については、回復期リハビリの実習においてはできるかもしれないがなかなか難しい。一つの方法とすれば、退院時の訪問指導で家に行く場合があるので、そのときにケアマネージャーや福祉用具の業者等の多職種の者と一緒に行くことがある。また、最近は地域ケア会議というものが行われているので、そこで多職種が集まって話をしている。学院にはいろいろな学科があるので、学科間の交流を進めていくといい。
- ・多職種連携については、作業療法士の問題として理学療法士と同じことをしている作業療法士とよく言われる。しかし、チームアプローチを経験すると、チームの中に作業療法士が作業療法士としていなかったらチームが成り立たないことに理解が至る。他職種のことも理解しながら、その中で作業療法士が専門的に聞かれたときに、作業療法士として答えられるような専門性を持っていないとチームアプローチが成り立たないというところは、しっかりと指導するようにしている。
- ・多職種連携については、臨床工学技士はもともとチーム医療で成り立っているもので、臨床実習の現場で看護師の業務の手伝いや医師の補助等を見ることができていると思う。チーム医療として協力できるところは協力するように実習生には指導している。

- ・学生時代から多職種連携に関して理解を進める教育を行うという流れがある中で、学院では、5学科の学生がお互いの職種の仕事内容を知っておくということから始めるといいと思う。オープンキャンパス等で高校生に対して各学科で説明していることなどを、特別講義として各学科の教育内容を他学科の学生に聞かせる教育機会を考えてみてはどうか。
- ・救急救命学科では、救急現場を再現して競い合う学生救急救命技術選手権に参加している。学生ホールでその練習を行っているところを見たことがある。その練習を学院に在籍している間に、他の学科の学生は必ず見るというようなことができたらいと思う。
- ・多職種連携のチーム医療の最大の問題は、一つのチームがいつも同じメンバーではないということである。患者さん毎にチームのメンバーが違いうし年齢や経験の差もあるので、いつも同じような発言がみんなできるとは限らないので、いいカンファレンスが常にできているとは限らない。

5. その他

特になし

辻野学院長より、本年度での教育課程編成委員会の委員の任期（2年）満了に伴い、次年度も引き続き委員をお引き受け願いたいとの案内がなされた。

6. 閉会